



数人の若者たちは、自分たちの犯した罪を深く感じど  
うしたらよいのか判らなくなりました。お上に届け出  
ようか村役人にお話して指図を受けようかというく  
迷ってしまいました。しかしそのころは代官の取り調  
べは、とても厳しい事をきいていました。そこで若者  
たちは相談して、法印が酒を飲んで山道を歩してい  
るうちに足をすべらしてがけから転げ落ちたようにした  
方がよいと考え、夜が深くなるのを待つて山の方へ運  
んで行きました。そして梶内の近く月館と御代田の村  
境から御代田の方へ転げ落ちました。御代田の人たち  
は村役人を始め、大勢集まってお寺のお坊さんを頼ん  
でねんごろに法印の霊を慰めました。それから間もな  
く月館の法印屋敷の近くから出火して部落の大半が焼  
けました。その後、引き続き三回も字町に火事が起こ  
り、部落の人たちは非常に困窮し、よその村に移った  
人も沢山ありました。そしてだれいうとなく法印の死  
骸のあった所を法印ころがしというようになりました。